



## 緊急入院・手術

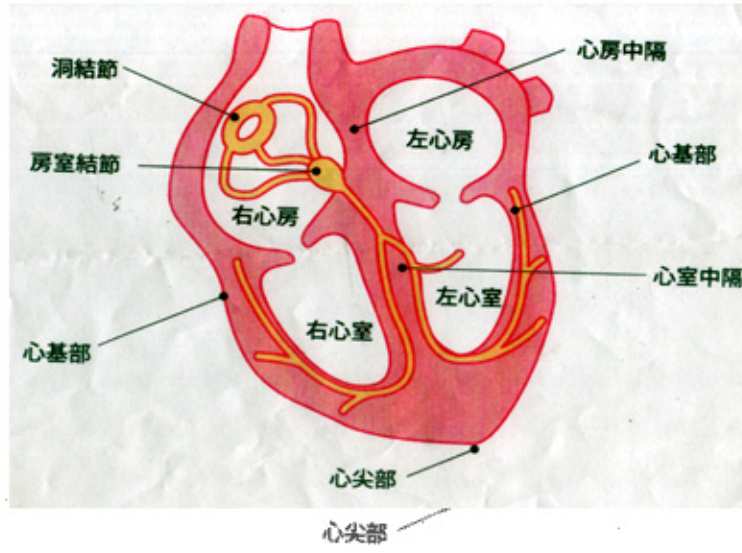
予期せぬ出来事①

長い人生、誰でも予期せぬ出来事に遭遇する。自分のように喜寿を過ぎるとその機会も多くなる。しかし、今回のようなことは初めてである。

この「巡礼の道」を書き始めたのは2006年(平成18年)。以来、自分の都合で休んだことは1度もない。しかし、今回ばかりは2カ月間休ませてもらった。わざわざ電話で「掲載されていないのはなぜ」と問い合わせたのだ。有り難いことである。今回再開出来たのもその方々のお陰である。

さて、私が最初にペースメーカー植え込み手術を受けたのは平成9年、もう21年も前である。病名は「洞機能不全」。以後、ペースメーカーの入れ替え手術をしたことはあるが、必ず半年に一度は機械検査を受けて来た。

掲載の図のように、心臓はいろんな部分から成っている。普通、脈拍というのは「洞結節」からの指令で脈が打つらしいが、自分の場合、脈数が低く、



心臓は多くの部分からなっている

因があったとは夢にも思わなかった。

というわけで、5月中旬に東京で開かれた山口高校卒業後70年の節目の同期同窓会にも出席し、司会もさせてもらって何とか大役も果たして帰宅したのだが、何か調子が良くない。主治医からは「何かあったらすぐ来なさい」と言われていたので、自分の予約の診察日ではないが、医師に連絡して病院に向かった。

診察を受けるや否や「ペースメーカーの電池がないか、ペースメーカーをつなぐリード線が切れていない」と言われる。私は「半月前のペースメーカーの検査では、6カ月間隔だった検査を4カ月にしてください」と言われたばかり。そして5月中旬に安心して上京したのである。

それが突然の緊急入院。手術になるうとは。全く予期せぬ出来事である。

手術後は付き添いに職場から長男や次女が駆け付け、私のベッドの下で添い寝してくれた。その時はそれを知っていたが、あとになってその記憶が全くない。そのことを主治医に言う。「僕が毎日顔を出したのも覚えてないでしょう。それは血液が頭までよく回っていなかったからでしょう。」これまた、予期せぬ出来事である。

手術は主治医ではなく、若い先生がして下さったが、その彼は山高の後輩だったことがわかり、どれほど勇気づけられたことか。

当初、入院は10日間くらいと言われていたが、この際、過去のデータを含めすべて検査するということがあった。

今回の入院、手術ほど、家族の絆(きずな)と言うか、つながりを感じたことはない。これが今回の一番の収穫である。

特に末っ子で長男の息子は結婚してから何となく絆が希薄になったように思っていたが、私の勘違いであった。日ごろ、毎日電話してくれる長女も毎週のように東京から飛行機で土、日曜を利用して帰って妻を助けてくれた。

さて、手術などはすべて順調と思われたのに、一言も退院の話が出て来ない。実はまたまた予期せぬ出来事が起こったのである。